

# 全学共通教育新カリキュラムについて

武 重 雅 文	(センター長・教育学部教授)
田 中 健 二	(共通教育部長・教育学部教授)
櫻 井 佳 樹	(調査研究部長・教育学部教授)
葛 城 浩 一	(大学教育開発センター准教授)
佐 藤 慶 太	(大学教育開発センター講師)
最 上 英 明	(大学教育開発センター教授)
岩 中 貴 裕	(大学教育開発センター准教授)
石 川 雄 一	(教育学部教授)
中 村 邦 彦	(経済学部教授)

## 1. 全学共通教育カリキュラムの再編と実施に向かって

### (1) はじめに：「21世紀型市民」育成プロジェクトと新カリキュラム

いよいよ次年度から、本学の全学共通教育のカリキュラムは一新される。その具体的内容は後述される通りである。その紹介に入る前に、ここでは新カリキュラムを策定するに至った経緯とカリキュラムの概要について記すことにしよう。

平成20年度より大学教育開発センターでは、本学における全学共通教育カリキュラの再構築を目指してプロジェクトを立ち上げた。「21世紀型市民」育成のための全学共通教育カリキュラムの構築に向けて」と称する、やや名称の長いプロジェクトである。ここでは、略して「21世紀型市民」育成プロジェクトと呼んでおこう。このプロジェクトを立ち上げるに至った理由は、この10年余りの間本学の全学共通教育でもいくつかの改革が施されたが、それらがともすればカリキュラム全体の体系的まで考慮したものではなかったことにある。平成20年度のプロジェクト報告書でその問題について、われわれは次のように記した。

「変容する社会のなかで、大学が果たすべき役割も変化してきている。香川大学全学共通教育のこの段の改革も、それに対応するものであった。しかし、それらが体系的を欠いた個々の対応であったことは否めない。はたして、21世紀社会において何が大学で教育すべき教養なのか？その概念に基づき、カリキュラムの体系化をはかる作業に着手すべきときではないか。2005（平成17）年の中教審答申『我が国の高等教育の将来像』は、その意味において刺激的なものであった。そこでは、各大学にその担う役割を求めるとともに、『21世紀型市民の育成を目指した学と学士課程の実現』の重要性が指摘された。また昨年末の中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』では、『21世紀型市民』に相応しい『学士力』が例示され、それを実現すべく学士課程をどう構築するかが議論された。これらの提案に、われわれはどう取り組むのか。もっとも基本的な大学教育の課題に、いま本学も直面しているというわけでよいであろう。本事業は、こうした課題に対処するための第一歩として大学教育開発セン

ターが取り組んだものである。」<sup>1)</sup>

発足以降3年間、新カリキュラムの策定を目指して「21世紀型市民」育成プロジェクトは活動してきた。平成20年度は全国100大学へのアンケート調査などの調査研究を行い、平成21年度には「学士力」13項目を核とする指標によって現行実施科目の総点検を実施した。そして平成22年度は新カリキュラム案の策定作業を行った。この新カリキュラム案は、大学教育開発センター会議、評議会で若干の修正を経て、役員会で了承され次年度から実施される。この新しいカリキュラムを策定する上で、特に考慮した諸点について次に触れておこう。

## (2) 新カリキュラム策定における諸課題

「21世紀型市民」育成プロジェクトの調査研究活動を通して、新カリキュラム策定において越えねばならないいくつかの課題が明らかになった。まず、アンケート調査および訪問調査を通して明らかになったのは、①教育理念を明確にした上での、体系的なカリキュラムの構築を目指すこと、つづいて②初年次からの順次的な科目配置と学生の学習支援となるシラバス作成およびカリキュラム・マップを提示すること、そして③カリキュラムを実効化せしめる組織整備である。先行大学の成功例は、これらの課題への積極的取組の成果であった。香川大学として行わねばならない課題は、まず①の教育理念を明確にすること、プロジェクトとの関連で言えば、香川大学版の「21世紀型市民」の内容を明確にすることである。その際例示された「学士力」項目が参考になるが、地方国立大学という特性を考えれば、地域への理解も重要項目として加えねばならない。さらには、これまでの本学における全学共通教育の実績も考慮しなければならない。歴史を顧みない改革は荒唐無稽な結末を迎えかねないし、本学の現行科目においても、十分に「21世紀型市民」育成に対応できるものも少なくないと思われるからである。

こうした課題を検討するために実施したのが、「学士力」13項目に「地域理解力」を加えた指標による、現行カリキュラムの総点検であった。シラバスをデータとして昨年度実施されたこの総点検からは、主題科目、教養ゼミナールをはじめ多くの科目群で意図された教育目標が、かなり実現されていることが明らかになった。一方、21世紀社会の課題に立ち向かう香川大学版の市民育成という観点からみると、①「統合的な学習経験と創造的思考力」、②「市民としての社会的責任」と「倫理観」、③「地域に関する知識の理解」、さらには④「コミュニケーション・スキル」を中心とする汎用的スキルの育成に関しては、新科目の設立や授業整備によって補う必要があることも分かった。

このような検討を踏まえ、教育目標を「(21世紀社会の課題に立ち向かう)豊かな学問的知識と地域理解を合わせもち、汎用的なスキルとともに主体的な市民としての態度を形成した人間の育成」<sup>2)</sup>において、本年度のプロジェクト課題として新カリキュラムの策定作業に着手した。この際、平成22年1月に設置された全学の教育プロジェクト・チームの学士課程教育全般における見直しと歩を合わせ、香川大学における学士課程教育の基礎となる共通部分の教育を担うカリキュラム構成を目指した。こうして構想されたものが新カリキュラムである。以下、4つの特徴に焦点を絞り、その概要について記していこう。

## (3) 全学共通教育の新教育理念・目標

新カリキュラムの理念として、前述の教育目標を具体化し、香川大学版の「21世紀型市民」をつぎ

のような能力・態度を有するものと想定した。

- ① 21世紀社会の諸課題に対する探求能力
- ② 問題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）
- ③ 広範な人文・社会・自然に関する知識
- ④ 地域に関する関心と理解力
- ⑤ 市民としての責任感と倫理観

これら5項目を香川大学生として身につけるべきスタンダード（共通教育スタンダード）とし、学士課程教育のなかで基礎的教育を担うという全学共通教育の役割を考慮して、共通教育スタンダード各項目における到達基準を以下のものとした。

- ① 21世紀社会の現状を理解し、その課題と解決策を自己と関連づけて探求することができる。
- ②-1 日本語の言語表現を適切に理解し、自らの見解を文章や口頭で分かりやすく伝えることができる。
- ②-2 情報伝達に関わる問題を理解するとともに、情報の適正な選択、利用のための基礎的な技能を習得する。
- ②-3 異文化について開かれた態度をとれるようになるとともに、一つ以上の外国語において、読み、書き、聞き、話すための基礎的な能力を身につける。
- ②-4 健康で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる。
- ③ 人類の文化、社会および自然についての幅広い知識とともに、学部専門課程を進んでいく上で必要な学問的基礎を身につける。
- ④ 地域社会の現状と課題に関心を持ち、自己と関連づけて理解することができる。
- ⑤ 社会において自己が果たすべき役割や、市民としての責任ある行動について理解を深め、そこから自己や社会の未来について考えることができる。

これらは、それぞれ後述される科目群の到達基準を指し示すものでもある。

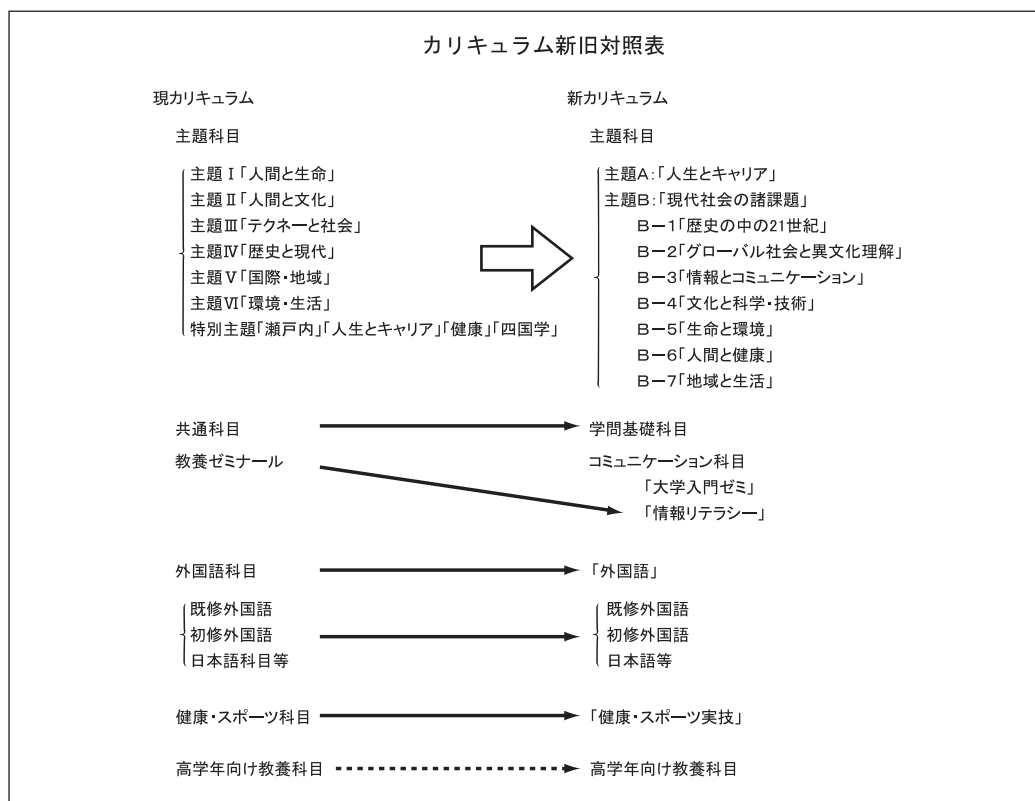
#### （４）科目の再編成について

現行のカリキュラムでは、全学共通教育は7つの科目群、すなわち主題科目、共通科目、教養ゼミナール、外国語科目、日本語科目、健康・スポーツ科目、高学年向け教養科目から成っていた。新カリキュラムでは、共通教育スタンダードの到達基準と関連づけ、これらを主題科目（主題A・B）、学問基礎科目、コミュニケーション科目の3科目群に再編した。主題科目、共通科目は狭義の教養教育に相当する主題科目、学問基礎科目に、狭義の共通教育に相当する汎用的スキルの育成に関わる科目はコミュニケーション科目に統合した。

到達基準との関わりでは、主題科目は到達基準①を中心に、④、⑤を想定したものとして再編した。このため、⑤に関わる科目として主題A（人生とキャリア）を新設するとともに、④に関わる主題（地域と生活）を主題Bに加えた。学問基礎科目は共通科目を名称変更し、到達基準③に相応して各ディシプリンの基礎教育に特化した科目である。また、コミュニケーション科目は、到達基準②のサブ基準を構成する4つの科目群、大学入門ゼミ、情報リテラシー、外国語（既修外国語・初修外国語・日本語）、健康・スポーツ実技から構成されるものとした。

このうち、大学入門ゼミは教養ゼミナールを名称変更し、②-1の基準にも対応できる内容を持つ

ものとし、情報リテラシーに関しては、類似した内容を持つ現行の学部開講科目を再編し、全学共通科目として実施することとした。こうした改編は、汎用スキル育成の重要性を考慮した結果であり、同様の観点から外国語ならびに健康・スポーツ実技の授業においても改善を図ることとした。これら再編の全体像は下図に示される通りである。なお、各科目の具体的な実施内容に関しては後述されるので、それらを参照して頂きたい。



### (5) 順次的な科目配置と学習支援

さて、教育理念の明確化とそれに沿ったカリキュラム構成は、新カリキュラム策定の目標であったが、必要な方策はそれには留まらない。前述の通り、学習者の視点にたち学習を支援する方策も、新カリキュラム策定に付随する課題であった。もちろんこの課題は、学士課程全体に及ぶものであるため全学共通教育のみで解決できるものではないが、今回は、初年次教育を充実し順次的な科目配置を考慮すること、英語教育での少人数クラス化を図ること、またシラバスに工夫をこらすことで学習支援の一步とすることとした。

初年次教育に関しては、主題A（人生とキャリア）およびコミュニケーション科目の大学入門ゼミ、情報リテラシーを初年次履修科目とし、各学部のカリキュラム改編と併せ平成24年度からはこれらをすべて必修化することとした。英語教育では、23年度入学生から25人以下の少人数クラスでの授業を実施し、学習の進展を期すこととした。

また、シラバスに関しては授業内容だけではなく、共通教育スタンダードの到達基準も明記することによって、各授業のカリキュラム全体における位置を分かりやすくした。これらはまだ学習支援の端緒にすぎないが、早急に学部と一体となった各学士課程のカリキュラム・マップ作りに取り組みたいと考えている。

## (6) 共通教育コーディネーター制の導入

この期の改革の3つ目は、コーディネーター制の導入である。現行実施体制の不備については、これまでも指摘されてきたし、前述のように「21世紀型市民」育成プロジェクトの課題でもあった。新しいカリキュラムを実施するに当たって、カリキュラム理念や目標を実効ならしめるには、それを保証する組織的支援が必要となる。

全学共通教育の専任教員を増やすこともその方策のひとつであるが、全学出動体制を維持しなければならない本学の特性を考えれば、それとは違う道を探らねばならない。これらを考慮し、全学部から全学共通教育の企画・運営に積極的に参加する教員を共通教育コーディネーターとして迎える制度を導入することとした。この方策は、愛媛大学などですでに講じられているが、全教員が26ある科目領域のどれかに参加し、全学共通教育の実施に関わっているという香川大学方式を前提に、香川大学版のコーディネーター制を導入する予定である。

次年度の4月から導入されるこの制度においては、科目領域の幹事、大学教育開発センターの専任教員、各学部1名の教員からなる総勢20名あまりのコーディネーターを任命し、新カリキュラムの運営・実施など大学教育開発センターの活動において中心的な役割を担って頂くことになる。またセンターの活動には、調査研究部のカリキュラム開発・FD活動、共通教育部のカリキュラム編成・実施、外国語教育部の授業開発などがあるが、役割を分けてコーディネーターに関わって頂きたいと考えている。

## (7) おわりにかえて

今回のカリキュラム再編の経緯、新カリキュラムの概要ならびに制度整備に関しては、以上の通りである。新カリキュラム構築のためのプロジェクトが発足して3年、カリキュラムは出来上がった。授業担当者を決定する編成作業も、ほぼ終わった。しかし新カリキュラムの実が結ぶか否かは、4月からの運営・実施にかかっている。また新科目となる、大学入門ゼミ、情報リテラシーにおいては、正式の開始は次々年度を待たねばならず、試行が始まる段階である。その意味では、全学共通教育の今回の教育改革はようやく緒についたばかりである。カリキュラムが成果と結びつく取組が、いよいよこれから始まることになる。そしてこれを端緒に、次の目標となる学士課程教育の再構築に向け、全学をあげた取り組みを進めねばなるまい。

(武重雅文)

## 注

- 1) 香川大学大学教育開発センター編、2009、『「21世紀型市民」育成のための全学共通教育カリキュラム構築に向けて報告書』（平成20年度版）1頁。
- 2) 香川大学大学教育開発センター編、2010、『「21世紀型市民」育成のための全学共通教育カリキュラム構築に向けて報告書』（平成21年度版）37頁。



## 2. 全学共通科目の実施内容

### 主題科目

主題科目は、21世紀を生きる学生が将来市民として直面する社会的課題の発見とその課題解決力を育成することを目指す科目である。主題科目は下記のとおり主題A「人生とキャリア」と主題B「現代社会の諸課題」の2つに区分される。

### 主題A「人生とキャリア」

#### 1. 概要

主題A「人生とキャリア」は、香川大学共通教育スタンダードのうち主として⑤「市民としての責任感と倫理観」を育むことを目指し、学士力の「倫理観」「市民としての社会的責任」に資する科目である（2単位必修）。21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また生きているのかについて学んでいくとともに、高校から大学、さらに社会へと出ていく学生が、市民としてこれからより充実した人生を歩み、キャリアを積んでいくための手助けとなる授業群である。

#### 2. 基本的方針

開講科目は、現行の特別主題「人生とキャリア」の科目を中心として、関係する科目領域の視点から上記内容にアプローチした科目を加えたものとする。

授業形態としては、座学を中心としたものと、グループワークを中心としたものの2つがあり、前者の授業規模は200人以下、後者の授業規模は100人以下とする。

主題A「人生とキャリア」の科目の開講は、基本的には前期開講とする。ただし、授業内容によっては後期開講のものもある。

#### 3. 平成23年度の開講科目

平成23年度は12科目（+夜間主1科目）開講する。そのうち、7科目（+夜間主1科目）については、教育・学生支援機構に所属する教員が担当し、残り5科目については、哲学・倫理学、心理学、社会学、教育学、政治学の科目領域に所属する教員が担当する。

（葛城浩一）

### 主題B「現代社会の諸課題」

#### 1. 概要

主題B「現代社会の諸課題」は、香川大学共通教育スタンダードの①「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」と④「地域に関する関心と理解力」に資するとともに、主として学士力の「問題解決力」を育む科目である。この主題での主たる問いは、〈私たちが生きる現代社会・21世紀はどのような社会なのだろうか〉という問いである。しかし現代社会は複雑に入り組んでおり、そうした諸課題をトータルに捉えることは容易ではない。まずは現代社会において何が問題であるのか、課題を発見する眼

を養うことであり、さらにその課題解決のために主体的に取り組んでいく態度を形成することが重要である。

## 2. 基本的方針

主題Bは「歴史のなかの21世紀」「グローバル社会と異文化理解」「情報とコミュニケーション」「文化と科学・技術」「生命と環境」「人間と健康」「地域と生活」の7つの主題を用意しているが、全体として6単位以上を自由に選択履修できるものとする。

B-1「歴史のなかの21世紀」は、21世紀という時代を、過去・現在・未来という時間軸において捉える視点を学ぶ授業群。B-2「グローバル社会と異文化理解」は、現代社会の課題を「グローバル」や「異文化理解」というキーワードを手掛かりに考える授業群。B-3「情報とコミュニケーション」は、「情報社会」の課題を明らかにする授業群。B-4「文化と科学・技術」は、現代社会の諸課題を「文化」という視座から考察する授業群。B-5「生命と環境」は、人間が生きていく「環境」の在り方を考えていく授業群。B-6「人間と健康」は、高齢化社会に生きる人々の「健康」について考えていく授業群。そしてB-7「地域と生活」は、「四国学」など、本学が立地する地域を中心に、市民が暮らす地域の課題を探る授業群である。これらの主題（テーマ）は、学問を超えた共通の諸課題であり、それらを学際的に考察し、総合的な知を促すことも主題科目の主要な目的のひとつである。

## 3. 平成23年度の開講科目

平成23年度は、45科目開講し、各主題の科目数は以下のとおりである。

B-1 歴史のなかの21世紀	5科目
B-2 グローバル社会と異文化理解	6科目
B-3 情報とコミュニケーション	5科目
B-4 文化と科学・技術	10科目
B-5 生命と環境	6科目
B-6 人間と健康	7科目
B-7 地域と生活	6科目
合計	45科目

(櫻井佳樹)

## 学問基礎科目

学問基礎科目は、従来の共通科目に該当する科目群である。

### 1. 概要

学問基礎科目は、従来の共通科目の第一の目標である「体系的に確立された学問分野を幅広く学んで、その初歩的な理解を手に入れる」を明確化する。香川大学共通教育スタンダードに対応する到達基準の項目でいえば、③「人類の文化、社会および自然についての幅広い知識とともに、学部専門課程を進んでいく上で必要な学問的基礎を身につける」ことを担う科目となる。また、第二の目標である「特に自然科学系のいくつかの共通科目の場合に、今後学部での専門教育を受けるのに必要となる基礎的知識を確実に習得させる」については、従来と同様に、自然科学系のいくつかの科目ではリメディアル教育の役割も担う。

### 2. 基本的方針

開講科目は、現行の共通科目を中心に編成した。

授業形態としては、講義を中心としたものと、地学P・物理学P(イ・ロ)・化学P・生物学Pなど実験・実習を中心としたものの2つがあり、前者の授業規模は200人以下、後者の授業規模は授業に必要な設備・機器等の規模によるものとする。

### 3. 平成23年度の開講科目

平成23年度は、以下に掲げる70科目(+夜間主4科目)を開講する。

哲学A	哲学B	論理学A	倫理学B	芸術	芸術A	心理学A
心理学B	心理学C	心理学D	心理学E	社会学B	社会学C	社会学E
社会学F	教育学	歴史学C	歴史学D	歴史学E	文学A	言語学
法学Aイ	法学Aロ	法学B	政治学A	経済学B	経営学	数学A
数学B	数学Cイ	数学Cロ	数学Cハ	数学C	数学Dイ	数学Dロ
数学Dハ	数学Dニ	数学E	数学F	数学G	地学F	地学P
物理学Aイ	物理学Aロ	物理学Aハ	物理学Aニ	物理学Bイ	物理学Bロ	物理学Bハ
物理学D	物理学E	物理学Pイ	物理学Pロ	化学A	化学Bイ	化学Bロ
化学C	化学D	化学P	生物学A	生物学Bイ	生物学Bロ	生物学C
生物学P	地理学B	統計学A	情報科学	情報科学A	医学	看護学
(夜間主)						
文学	社会学	地学	看護学			

(田中健二)



## コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」

### 1. 概要

「大学入門ゼミ」は、1年次生対象の少人数参加型の科目である（2単位必修）。香川大学共通教育スタンダードに関していうと、②「課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）」に資することを目的としており、香川大学生として必要なアカデミック・リテラシーの育成の場として位置付けられている。

### 2. 基本的方針

「大学入門ゼミ」の主な目的は、①大学生・社会人として必要な知的技法の基盤育成、②大学での参加型・能動型学習への転換ないしは導入、③責任感・協調性のある態度の涵養、の3点である。①と対応して、「ノートのとり方」、「レポートの書き方」、「日本語技法1」、「日本語技法2」、「プレゼンテーションの方法」という5つのコンテンツを、すべての大学入門ゼミで指導することが決定している。これら5つのコンテンツについては、大教センター教員が中心となって、ガイドブックを作成した。なお、上記の5つのコンテンツに関して、学部ごとに指導の力点が異なると考えられるので、各学部の教員が当該学部生を担当することを原則とする。また、②、③の目的のために協同学習を授業に導入することを推奨する。協同学習は、能動的な学習を促すためにも有効であるが、責任ある行動が必要とされるという点で責任感・協調性のある態度の涵養に資すると考えられるからである。

### 3. 平成23年度の開講科目

平成23年度は、夜間主を含め54の大学入門ゼミが開講される。内訳は、教育学部16、法学部9（夜間主1）、経済学部5（夜間主1）、医学部6、工学部13、農学部7である。医学部、工学部、農学部は各キャンパスで開講する。

現行カリキュラムでは、「大学入門ゼミ」と内容上重複する学部開設科目がある。そのため本格実施を平成24年度とし、平成23年度は、①「教養ゼミナール」の名称を残し、内容を「大学入門ゼミ」に近付ける、②「大学入門ゼミ」は原則的に必修だが、来年度はこれを見送る、③学部開設科目として「基礎ゼミナール」を持つ経済学部は、「基礎ゼミナール」の内容を「大学入門ゼミ」に近付ける、という3点の過渡的措置を講ずる。

(佐藤慶太)

## コミュニケーション科目「情報リテラシー」

### 1. 概要

香川大学に入学する全学生が、早期に身につけるべき情報リテラシーを学習する。

情報リテラシーとは、コンピューターが使えるというだけではなく、その技術を利用して、さまざまな情報を収集・分析し、適切に判断する能力、それらをモラルに則って活用する能力のことである。情報リテラシーは香川大学生として、あるいは社会人として、もはや必須の能力であると言ってよいであろう。今回のカリキュラム改革により、情報リテラシーは全学共通2単位の必修科目になった。ただし、学部専門課程のカリキュラム改革が平成24年度に行われるため、23年度に限り、授業はそれぞれの学部において従来の授業科目名のままで実施される。

### 2. 基本的方針

情報リテラシーおよび情報技術に関する授業科目は学部によって内容や必要性が異なっている。そこで、全学共通科目としての情報リテラシーは、次のような「共通項目」を定め、それ以外の部分は学部の裁量にゆだねることにした。

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 1. パソコンの基本操作 | 6. プレゼンテーション    |
| 2. ウェブ       | 7. 情報倫理とセキュリティー |
| 3. メール       | 8. 情報検索・文献検索    |
| 4. 文書作成      | 9. コンピューターの基礎知識 |
| 5. 表計算       | 10. ネットワークの基礎知識 |

この中には学内の情報施設の利用法とマナー、図書館蔵書の検索方法等が含まれており、それぞれ総合情報センター、附属図書館が支援してくれることになった。

### 3. e-ラーニングの活用

多数の学生の実習を含む授業を効率的に実施するために、授業にはウェブベースのe-ラーニングを活用する。お知らせ、教材の提供、達成度確認テスト、アンケート、質疑応答、課題・レポートの提出等、多様な使い方が可能である。学生はインターネットを介してどこからでも教材にアクセスでき、達成度確認テストを受験し、レポートを提出できる。また、入学する学生間の情報技術のレベル差が大きくなっていると考えられるので、e-ラーニングはその個人差を吸収する上でもその効果が期待できる。

(中村邦彦)

## コミュニケーション科目「外国語」既修外国語（英語）

### 1. 概要

既修外国語（英語）は、香川大学共通教育スタンダードのうち、主として②「幅広いコミュニケーション能力」を育むことを目指している。具体的には、英語を使って読み、書き、聞き、話すために必要とされる基礎的な能力を学生が身につけることを目標とする。

今日、英語は英米人の母語というあり方を超えて、世界で最も広い範囲で使用されている共通語となっている。特にビジネスや科学研究の分野においては、共通語である英語使用の利便性は非常に高く、その習熟が必要不可欠なものになっている。

国際共通語としての英語の教育は、従来の外国語教育とは異なる性質を持つものと考えらるべきである。言語とその文化的背景を区別し、文化的負荷を可能な限り軽減し、コミュニケーションの手段として言語を指導していくことが求められている（日本学術会議、2010）。新カリキュラムではこの点を考慮し、コミュニケーション能力の育成を重視した授業を提供する。

### 2. 基本の方針（現行カリキュラムからの変更点）

統一シラバスの採用、統一評価基準の確立、TOEIC を利用した成果確認等、現行カリキュラムの優れた点は踏襲した上で、下記の変更を行う。

#### （1）クラスサイズの変更：

1 クラスの受講生の数を 25 人以下とする。これにより、授業において英語を用いたコミュニケーション活動を行うことが可能になる。同時に、ひとりひとりの学生に対してより行き届いた指導が可能になる。

#### （2）e-learning の導入：

PC、携帯電話を使用して英語学習ができるシステムを導入する。これにより、トータルで 1,680 問の英語の問題を各自のペースで学習することが可能になる。

#### （3）共通テキストの導入：

全学生が授業において使用する香川大学共通英語テキストを導入する。この共通英語テキストを補助教材として使用し、TOEIC 対策を行う。

#### （4）テキストの変更：

コミュニケーション能力の育成に相応しい教材を選定し、それを主教材として使用する。選定する教材は、4 技能をバランス良く扱った総合教材（読解教材、DVD 教材を含む）とする。

#### （5）習熟度別クラスの導入：

1 年次後期はすべての学部において習熟度別クラスを導入する。これにより、各学生の英語力に応じた指導が可能になる。クラス分けは TOEIC のスコアに基づいて行う。

### 3. 開講科目

開講する科目は下記の通りである。なお、2011年度は新入生のみが新カリキュラムの適用となる。また、新カリキュラムの導入に伴い、教育専従の特命講師（大学教育開発センター所属）が3名採用される。

3年次生、4年次生を対象とした授業では、グローバルな局面で文化と言語を異にする他者と協同し交流する能力を育成するために、アカデミック・リーディング、アカデミック・ライティング、プレゼンテーションを中核とする授業を提供する。

- 1年次前期：Communicative English I（2単位）
- 1年次後期：Communicative English II（2単位）
- 2年次前期：Communicative English III（1単位）
- 2年次後期：Communicative English IV（1単位）
- 3年次以降：Communicative English V, VI（2単位）

（岩中貴裕）

#### 参考文献

日本学術会議、2010、「大学教育の分野別質保証の在り方について」

## コミュニケーション科目「外国語」初修外国語

### 1. 概要

外国語科目はコミュニケーション科目として位置づけられるようになり、初修外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語）の授業は、異文化理解力の向上にもより重点が置かれる。海外での語学研修も、これまで以上に重要度が増すものと思われる。

### 2. 基本的方針

開講科目は各外国語とも、現行の初級（1年次前期のI、1年次後期のII）、中級（2年次前期のIII、2年次後期のIV）、および2年次以降に履修する会話クラスという科目は、従来と大きな違いはない。ただし、韓国語はこれまで会話クラスがなかったので、平成23年度より新たに導入し、すべての外国語で会話クラスが揃うことになる。

### 3. 平成23年度の開講科目

平成23年度は例年同様、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語とも、初級（I, II）、中級（III, IV）、会話クラス（韓国語は新設）を開講する。授業を担当するのは、経済学部、教育・学生支援機構（大学教育開発センター）に所属する専任教員、および各外国語の非常勤講師である。

（最上英明）

## コミュニケーション科目「健康・スポーツ実技」

### 1. 概要

今回の全学共通教育新カリキュラムにおいて「健康・スポーツ科目」は、コミュニケーション科目のひとつ「健康・スポーツ実技」として位置づけられた。また、香川大学共通教育スタンダード①～⑤が提示され、全項目に関してその基礎を修得することが新カリキュラムの理念に掲げられた。その②-4「健康で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる」という到達目標は、特に「健康・スポーツ実技」に関連している項目であり、香川大学版「21世紀型学士」の学士力質保証の方針に従いながら、今回「健康・スポーツ実技」科目の再構築を実施した。

さて、大綱化以後の「健康・スポーツ科目」では、単にスポーツ実技を通じての生涯スポーツへの実践能力の確保のみならず、今回の香川大学共通教育スタンダードと新カリキュラムの理念を先取りするように、実技授業を通じた問題解決のためのコミュニケーション能力の獲得やリーダーシップの育成等を目標に掲げ実践してきた。その結果としては、学生による授業評価における「授業に参加している教員や学生とよい人間関係を作ることができたか」という質問に対し、科目全体で平均 4.32 (2009 年度前期)、4.25 (2009 年度後期) の高い評価を得ており、このことから、コミュニケーション科目としての「健康・スポーツ実技」の意義は高いと思われる。

### 2. 基本の方針

今回、新カリキュラムの導入にあたり、到達基準②-4、「健康的で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる」に対応すべく現行の実技を中心とした科目を大きく2つの授業分野に分類した。

### 3. 平成 23 年度の開講科目

#### (1) 健康・スポーツ実技A・・・健康コミュニケーション分野

生活習慣を見直し、健康的で有意義な生活を送るためのヒントを提示したり、その実践を行ったりする授業である。健康・スポーツ実技が必修科目であり、最もその価値を理解すべきであろう医学部学生を対象に「健康・スポーツコミュニケーション」の授業名で開講する。また、全学部の新入生を対象に健康的な生活習慣（早寝・早起き・朝ご飯など）の形成を目指した大学生生活入門プログラムとして長期的集中授業形式で実施する「健康コミュニケーション」という授業を開講する。

#### (2) 健康・スポーツ実技B・・・スポーツ実技コミュニケーション分野

到達基準②-4「健康的で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる」の下線部分に対応すべく、全学部の学生を対象にこれまで行ってきた定時および集中開講の健康・スポーツ実技の内容をさらに発展・改良し、コミュニケーション力の育成を強調して、36科目（定時25科目、集中11科目）を開講する。

(石川雄一)